

韓国の大学における軍事文化と日常

——徴兵制をめぐる言説と予備役，現役，女子学生の実践

朴 眞煥

1 はじめに

本稿は韓国社会における徴兵制と一般社会に生きる人々との関係を明らかにすることが目的である。大学でのフィールドワークをもとに、徴兵制が学生たちにどのように受け入れられ、あるいは反発を受け、また利用されているのか、それが学生たちの日々の生活にどのような影響を与えていて、結果としてどのように「軍事文化」が生み出されていくのか、その過程について考察する。

戦争や紛争が相次ぐ今日、メディアを通じ、戦う兵士の姿を容易に目にすることができる。しかし、彼らはどのような存在なのかについて理解している人は少ないだろう。彼らは我々（一般社会に生きる人々）にとっては他者であり、遠く離れている「異文化」に生きる周辺的な存在である。異文化に生きる人々は文化人類学の主な研究対象であり、兵士たちもまた文化人類学的研究の対象になりうる。しかし、軍隊に関する文化人類学的研究はけっして多くない。その理由は、文化人類学が自分の社会を研究する学問ではなく、研究対象としての軍隊や軍人にアクセスすることが一般に難しいからである [Harrell 2003]。

では、韓国の場合はどうであろうか。韓国の場合、上述した理由に加え、南北に分断されているという国家の安全保障と直結する政治性からも軍隊研究を困難にさせている。特に、韓国が軍事政権下にあった1960年代から90年代にかけての約30年間、軍隊に関する研究は不可能だったと言えよう。軍事政権は軍隊研究を軍事政権の不当性を明らかにするものだとみなし、さまざまな検閲を行った。その結果、軍隊や軍人に関する研究が困難であったのは自明である。もう一つ、軍隊研究を困難にした原因として、徴兵制が生み出す軍事文化の日常化が挙げられる。これによって、韓国社会の軍事文化が他の文化と区別しにくい状況が生まれ、軍隊や軍人は「異文化、他者」ではなく、自らの文化となり、文化人類学的研究の対象からはずされてしまう。

しかし、1990年代になって軍事政権が崩壊し、民主化が進むにつれ、軍隊の研究も増えてきた。文化人類学的研究ではないが、韓国社会の軍隊に関する文献を分析すると、主に二つの傾向が見られる。一つは政治学や社会学的研究を中心とする社会制度や組織としての軍隊研究、もう一つは、軍隊とジェンダー規範との関係を中心とする研究である。

まず、政治学的、社会学的研究は軍人による研究が多い。軍隊の政策を知らしめ、軍隊の必要性や正当性を主張しているため、客観性に欠ける研究が多い。また、実際に軍事文化が日常生活の中で個人にどのような影響を及ぼしているのかについて分析してはいない。たとえば、Lee [1995] や Son [1998] は軍事文化と一般社会の文化とを区別し、二つの文化の共通点や差異について研究を行ったが、軍隊と個人との間にどのような関係があるのかについては考察しなかった。

次に、軍隊とジェンダー規範との関係を中心とする研究では女性の立場を中心に議論を行い、軍隊や軍事文化の男性中心性を明らかにした。すなわち男性中心の軍事文化が女性にさまざまな被害を与えたことを明らかにしたのである。確かにこれは否定できない側面であるが、暴力の主体としての軍隊と男性、被害者としての女性という図式を強調しすぎる傾向が見られる。この見方では男女の区別なく、女性も軍事文化を実践し、創出する過程に参加し、あるいは、参加しなければならない社会的現実を見過ごすこととなる。

たとえば、Oh [2001] は軍事文化により男女の差が社会的に正当化され、ジェンダー規範が強化されると主張する。また、Oh [2003] は、軍事文化が女性の日常にどのような影響を及ぼすのかを観察するために、軍事文化と女性のセクシャリティを関連させて分析した。Kwon [2000] は女性差別に加担している軍事文化は除去されなければならないと主張する。しかし、このような研究は、軍隊や軍事文化が及ぼす影響を女性に限って、軍隊や軍事文化が男女を問わずすべての人々に影響を及ぼす現実を無視している。

Moon [2005] と Kwon [2006] はこれまでの傾向を乗り越えようと試みた研究として評価できる。Moon [2005] は、韓国社会が軍国主義によって近代化を推し進めた国家であり、男性を中心に経済、政治的に発展し、男性と女性の非対称的な関係が認められると論じた。Kwon [2006] も韓国社会が軍事国家だとみなし、主に80年代に行われた学生運動に現れた軍事文化を分析し、軍事化された韓国社会における男女の非対称性を批判した。これらの研究は軍隊と一般社会を区別して扱ってきた先行研究の限界を乗り越え、軍隊や軍事文化を日常生活と関係づけて考察したことにその意味がある。しかし、いずれの研究も「軍事化された他者（男性）」と「他者によって影響を受けざるえない自分（女性）」という固定的な図式に基づいているところに問題がある。

本稿では、これから兵役を控えた男子学生と兵役を終えた男子学生、そこから排除されている女子学生たちの相互作用に注目し、その相互作用の場を軍事文化と日常生活とのコンタクト・ゾーンとして分析する。

本稿は7章から構成される。第2章ではなぜ大学を研究対象として取り上げたのかを説明する。第3章は韓国における徴兵制を法的観点から取り上げ、男子学生が兵士になるまでの過程を説明する。第4章から第6章まではフィールドワークで得た事例を分析することにする。

2 なぜ大学を語るのか

韓国社会において徴兵をめぐる言説にはどんなものがあるだろうか。代表的なものを挙

げると、「兵役を終えたこと＝成熟した・頼もしい・男らしい・社会性がある男性」, 「兵役を終えていないこと＝未熟な・自分の統制ができない男性」, 「兵役を拒否すること＝国民にならない存在」, 「軍隊に行ける人は正常」, 「軍隊に行けない人は異常」, 「徴兵に応じること＝自己犠牲」などである。また、「兵役はなるべく早く行くほうがいい」, 「兵役以前の大学生活は無駄」, 「軍隊はバカになる場, 兵役は無駄な時間」のように, 男性の日常生活に影響を及ぼす言説も認められる。本稿ではこれらを「徴兵制をめぐる言説」と呼ぶことにする。

それでは, なぜ大学であろうか。

まず, 大学の文化と軍事文化との共通点が挙げられる。前者は先輩と後輩間の厳しい序列関係, 個人より学科中心の集団的性格, 男性中心性, 集団的男性性や男性の暴力性, 教員と学生間の序列関係などを特徴とし, 後者は入隊時期や階級による序列関係, 国家のための個人の犠牲の強要, 暴力的男性性の強調を特徴とする。もう一つは, 大学は男子学生が兵役に従う空間という点である。2006年現在, 男性の4年制大学への進学率は59%を超え, 短期大学を含むと進学率は83.3%に至る。19歳になると兵役の義務が果たされるため, ほとんどの男性が大学在学中に兵役に服することになる。徴兵制は男子学生の生活を一定の方向で制限し, 画一的な生活を強要し, こうした男子学生と隣り合わせで生活する女子学生にも似かよった日常を経験させ, 共有する機会を提供する。

フィールドに選択した大学は, 韓国中部のS大学J学科である。教員は5人中, 3人が女性である。234人の学生総数の中, 男子学生は44人にすぎない。韓国の大学は「学生会」という学生自治の組織がある。学科と関わるすべての決定は学生会によって決められる。学生会長は選挙によって決められ, 学生会長は学生会を組織する。J学科の学生会長は女子学生で, 学生会の役員20人中, 3人だけが男子学生である。J学科は女子学生が中心で, 男子学生はマイノリティと言える。

3 韓国の徴兵制——学生から兵士へ

3-1 徴兵の種類

①第1国民役は, 18歳から30歳まで兵役義務がある男性の中で, 現役や, 補充役, 予備役, あるいは第2国民役に属さない男性である。すなわち, 18歳以上の兵役義務があるが, まだ兵役を終えていない男性のすべてを第1国民役と呼ぶ。第1国民役は必ず兵役を終えなければならない存在である。

②第2国民役は徴兵検査の結果, 兵役を遂行できないと判断された男性である。ただし, 戦争の時には軍隊を支援する義務がある。

③現役とは徴集や志願によって入隊をした兵士, あるいは軍人事法により, 入隊をした将校, 准士官, 副士官を含む。徴兵の中で, 現役だけが入隊を通じて兵役を遂行する。

④補充役とは入隊ではなく, 他の方法で兵役を遂行することである。補充役は「公益勤務要員」として, 市役所, 区役所, 郵便局, 地下鉄で公共の業務を支援する。

⑤予備役とは現役や補充役として兵役を終えた男性である。予備役は「予備軍」に編入

され、8年間、「予備軍訓練」を受ける義務がある。

3-2 徴兵への過程

男性は18歳になると、徴兵法第8項により第1国民役に編入され、徴兵資源として管理される。

3-2-1 徴兵検査

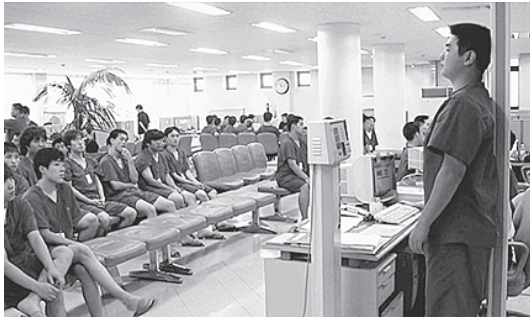


写真1 兵務庁での身体検査

(<http://www.mma.go.kr> 2008年11月10日閲覧)

徴兵検査には身体検査（写真1）、人格検査、適性検査がある。また、学力、病歴、犯罪も検査対象になる。

徴兵法第11項によると、「兵役義務者は19歳になる年に、徴兵遂行の可否の判断のために、地方兵務庁¹⁾が指定する日時、場所で徴兵検査を受けるべきである」と規定する。身体検査を受ける時は下着だけをつける。ただし、「担当医者や軍医

官の判断で、別の部屋で裸体で検査することも可能である」と規定している。これは国家による身体²⁾の検閲であり、男性1級から7級まで、等級が付けられる（表1）。

徴兵検査の中で、最も重要なのは身体検査である。身体等位の判定基準は表1に示す。身体検査を受ける時、軍隊に行かなくていい4級以下の等級を目指す男性の中には世間³⁾に流れている根も葉もない噂を信じて、いろんなことをやってみる人もいたり、より計画的に兵役を回避、免除を受けたりする人もいる。しかし、大部分の男性は3等級以上に評価され、悲しい気持ちになると同時に、国家から認定を受けた国家的存在になったという晴々した気持ちになる。また4等級以下の免除を受けた男性を差別することで、悲しい現実を積極的受け入れようとする複雑な感情を持つ。

身体検査は学校や会社が要求し、病院で受ける検査と同じだとも言える。しかし、その基準は厳しく、身長、体重、視力、血圧の順序で、各科の医学的検査を受ける。

人格検査は精神病の傾向がある人や反社会的異常性格者を選別する目的があるが、その

表1 身体等級の判定基準

徴兵		等位	判定	基準
第1国民役	現役	1級	合格	現役や補充役として兵役を遂行できる健全者。
		2級		
		3級		
	補充役	4級		
第2国民役		5級	不合格	現役や補充役として兵役を遂行できないが、戦争の時には軍隊を支援する義務がある者。
兵役免除		6級		病気や精神障害によって兵役の義務を果たせない者。
再検査		7級		現在、病気治療中で、再身体検査が必要な者。

兵務庁のHP、「徴兵の移行案内」, http://www.mma.go.kr/www_mma3/execution_2_3.jsp 2007年4月4日閲覧。

検査の効果については疑問があると言われている。

以上のような検査をもとに、国家は徴兵を「処分」する。

3-2-2 徴兵の処分

徴兵の処分とは徴兵検査により、最終的に徴兵の種類を判断、付与することである（表2）。

しかし、徴兵検査と関係なく、補充役や第2国民役になる人、すなわち、軍隊に行かない人がある。その対象は中学校を卒業していない男性、孤児、混血児、国籍帰化者などである。

表2 徴兵の処分基準

	1級	2級	3級	4級	5級	6級	7級
大学	現役 (軍隊で徴兵の遂行)			補充役 (公益勤務要員、産業機能要員など)	第2国民役 (軍隊に行かない)	兵役免除	再検査
高校卒							
高校中退							
中学卒							

兵務庁のHP,「徴兵の移行案内」, http://www.mma.go.kr/www_mma3/execution_2_3.jsp 2007年4月4日閲覧。

3-2-3 大学生の徴兵

徴兵法上、高校以上の学校に在学している学生は徴兵検査を受けた後、入隊を延期することが可能である。本研究の対象である4年制大学の場合、24歳まで延ばせる。

大学生は兵務庁に申し込み、入隊する。入隊希望日の2ヶ月前に申し込みをしなければならない。しかし、いつ入隊できるかははっきりわからない。そのため、休学し、入隊を待たなければならない場合がある。

3-3 現役兵としての生活

現役の徴兵期間は陸軍や海兵隊は24ヶ月、海軍は26ヶ月であり、空軍は27ヶ月である。現役兵の生活は、軍によって、訓練の内容に多少差があるが、「基本軍事訓練」の期間は5週間で共通している。まず、各軍の「訓練所」に配置され、5週間経つと、部隊に配置され、服務が続く。「基本軍事訓練」の内容は表3に示す。

表3 基本軍事訓練の内容

期間	訓練の内容
1週	入隊式、軍隊における礼節、忠、孝、礼などの道徳教育
2週	制式訓練、射撃の予備訓練
3週	テコンドー、射撃、行軍
4週	遊撃訓練、銃剣術、手榴弾の使用法
5週	化学戦訓練、体力検査
修了	軍事保安、修了式、部隊配置

陸軍のHP,「兵営生活の紹介」 <http://www.army.mil.kr/armylife/index.htm> 2007年4月4日閲覧。

この「基本軍事訓練」は約2年の服役期間中、繰り返し行われる。
 軍隊の日課は、夏は午前6時、冬は午前6時半から始まる（表4）。

表4 軍隊の日課表

時間 冬期, ()内は夏期	日課
06:00 (06:30) ~08:30 (09:00)	起床, 点呼, 朝食
08:30 (09:00) ~11:40 (12:10)	勤務, 訓練
11:40 (12:10) ~13:00 (13:20)	昼食
13:00 (13:20) ~16:10 (16:30)	勤務, 訓練
16:10 (16:30) ~20:00 (20:00)	教育, 自由時間
20:00 (20:00) ~21:50 (21:50)	掃除
22:00 (22:30) ~	就寝

陸軍のHP, 「兵営生活の紹介」 <http://www.army.mil.kr/armylife/index.htm> 2007年4月4日閲覧。

4 大学における徴兵制とそれに関する言説

韓国社会の男女の序列関係を反映して、大学で政治的に有利な立場にいるのは男子学生である。その中でも兵役を終えた「予備役」と呼ばれる男子学生は有利な立場に立つ。ここで、「現役」や「予備役」という言葉に注目したい。「現役」や「予備役」は兵役法上の用語だが、大学の日常では兵役を終えていない男子学生を「現役」と呼び、兵役を終えて復学した男子学生を「予備役」と呼ぶ。これは徴兵によって男子学生を区別することを意味する。これこそ大学の日常の中で徴兵制が——より広く軍事文化が——いかに自然に受け入れられているのかを端的に表す用語である。

なぜ軍事文化が大学の中で自然なこととして受け入れられるのだろうか。二つの理由が考えられる。

まず、大学は男子学生が常時兵役のため、休学、入隊、除隊、復学する空間であるからである。在学中に一般的な男子学生は身体検査を受け、入隊準備ができると潜在的軍人となる。在学中に休学し、入隊する。そこで、軍隊を経験し、除隊し、復学する。これが兵役の終わりではない。さらに「予備軍制度」がある。この制度により兵役の義務を終えた男子学生は1年に8時間、予備軍訓練所に行き、大学の同僚と一緒に軍事訓練を受ける。「予備軍訓練」の前後、大学の中では軍服を着て、軍人のように行動する予備役を目にする。

軍服を着た男子学生は急速に荒れ、集団的に行動する。酔って大学の施設を壊し、後輩を殴るなどの暴力的な男性性が現れる。予備軍制度は予備役が軍隊経験によって得た軍事文化に対する感覚を維持させる役割を果たす。徴兵制のため、大学の生活は常に軍隊と関係していて、軍事文化を身近なものにしている。すなわち、兵役を受ける男子学生は軍事文化と大学制度を基盤とする「大学文化」を結ぶ「媒介者」なのである。

次に、予備役と現役についての言説が大学における生活を支配しているからである。兵役は通過儀礼として、兵役により成熟した人になると思われている。それで「兵役を終え



写真2 予備軍訓練の期間、軍服を着た予備役が大学内を闊歩する様子
撮影：韓国漢陽大学文化人類学科映像人類学チーム



写真3 予備軍訓練後、大学で行われる予備役の飲み会
撮影：韓国漢陽大学文化人類学科映像人類学チーム

た男性＝成熟した・頼もしい・男らしい・社会性がある」という言説があり、予備役に政治的特権を与える。特に、この言説は予備役と現役間に序列関係を生む。しかし、このような序列関係はしばしば崩れ、予備役と現役が対立関係となる場合がある。さらに、徴兵制度が強要する男子学生の画一的な生活は彼らを明確に二分する。

徴兵制をめぐる言説が男子学生をどのように規定するのか。例として「兵役を終えた男子学生＝成熟した・頼もしい・男らしい・社会性がある」という言説を挙げて論議してみよう。

韓国社会において大学入学はそれまでの教育の第一目標であり、大学生になることは成熟した存在になることを意味する。しかし、男子学生はもう一つの通過儀礼を受けなければならない。これが兵役である。在学中に兵役を終えることは最も成熟した存在になることを意味する。

〈事例1：個別面談で〉

Q：男子は軍隊へ必ず行かなければならないんですか？兵役を終えた人は何か違いますか。

A：もちろん男子は軍隊へ行くべきです。そうしてこそ何か、頼もしくなるし…。軍隊で苦労を経験すれば、両親に孝行すると思うし、軍隊で団体生活を経験すれば、社会生活もうまくやれるでしょう。

Q：何か変化がありますか？軍隊に行けば？

A：学校で見ても、わかりますよ。予備役を見れば…。何でも一生懸命するから…。学科の行事がある時、女子にとって大変なことは予備役がしてくれるし、軍隊経験があるからと思いますけど…。うちのお兄さんも軍隊に行ってきたから変わったんですよ。お母さんに丁寧な言葉で話すし…。良い人になったようです。

(女性, 19歳, 1年生)

〈事例1〉から兵役を終えたことは成熟した存在になることを意味することがわかる。成熟した存在というのは社会的基準に順応し、道徳、礼節を守り、責任感がある存在とい

うことである。一方、兵役を終えてない男子学生を不完全な存在として規定する。以下の事例から現役の男子学生自身が、自分を未熟な存在と自己規定していることがわかる。

〈事例2：現役たちの酒の席で〉

ぼくは同じ学科の女の子と付き合っているんですよ。で、すまない気がする時が多いんですよ。まだ軍隊も行ってないし。もちろんお互いが好きだから、それが一番重要だと思えますけど、軍隊はほんとに私たちには大変なことですよ。すまないです。それで、特に予備役と付き合っている彼女の友達と会えばもっとそうです。ぼくはなんか幼く見えるような感じもするし、何もできない無能力な人と感じるし。

(男性, 20歳, 2年生, 現役)

〈事例2〉は兵役を終えていないという事実と結びついて、自己を不安定な存在として認識している。自分を不完全な存在と規定し、予備役との接触を通じて彼らが安定していると思う。それで、兵役にはなるべく早く行くほうがいいと思う。

現役と予備役の相異は兵役経験の有無だけから生ずるわけではない。彼らを取り巻く現実も無視できない。予備役は復学すると、就職や大学院進学などの問題が目前に迫る。一方、現役にとって入隊するとすべてが変わるため、今の生活は無意味だと感じる。

〈事例3：予備役の集まりで〉

軍隊に行く前まではお酒を飲んだ記憶しかありませんよ。講義に欠席することを軽く思ってたんですよ。飲み会などの学外の遊びを好む生活だったんです。その時、軍隊に行くと、どうせバカになるから今勉強しても意味がないと思ってたんです。それで復学してから、熱心に勉強すれば大丈夫じゃないかなと思ったんです。

(男性, 25歳, 4年生, 予備役)

〈事例4：現役たちの酒の席で〉

大学生になったから、なんか、解放感を感じて…。高校生の時お酒は飲めないけど、お酒も飲めるし、遊びが好きだから、遊びます。勉強は除隊した後からでも大丈夫だから。

(男性, 19歳, 1年生, 現役)

〈事例3〉、〈事例4〉のように、現役は大学の講義に欠席することを軽く思い、友達と飲み会などの遊びを楽しむ。このような生活は、徴兵制についての言説を強化する結果になる。現役にとって徴兵制は、今の生活が意味のないことと認識させる。それは「軍隊に行くこと＝バカになる」という言説の影響である。「バカになる」というのは、軍隊は大学の生活とまったく違うので、大学で学んだことを忘れてしまい、また、外の社会の変化に通じなくなることを意味する。このような認識は現実に価値を付与せず、兵役を終えた後の生活に価値を付与することとなる。これによって「兵役を終えていない＝未熟だ・自分の統制ができない」という言説が維持される。実際に、軍隊に行かない男子学生は外国

の語学研修に行ったり、時間的余裕を持ち、自己開発をしたりすることが可能で、「軍隊に行かない＝早く成功する」という言説もあり、しばしば兵役は社会的不平等を表す場合がある。

予備役は社会に出る準備をしなければならないので、現実的な問題により関心を持つ。これは社会が求める生活である。このように異なる生活の結果、現役と予備役に関する言説は強化される。

以上のように、大学における徴兵制は男子学生の生活を画一的に制限する。男子学生は徴兵制が埋め込まれた日常を営み、徴兵制の言説を強化、維持することとなる。次章からは徴兵制や徴兵制の言説が男子学生の日常にどのような影響を及ぼすのか、どのように実践されるのか、事例を挙げて詳しく検討したい。

5 男子学生の日常

徴兵制とその言説が男子学生の日常にどのような影響を与えるのだろうか。

軍事文化や言説が大学を支配することは現実であるが、このような現実の中でも、男子学生は自分なりの日常を営むための実践を行う。本章では徴兵制が埋め込まれた男子学生の日常生活において、どのような実践が行われ、いかなるプロセスにより現役と予備役集団が形成されるのかを中心に論じる。

徴兵制をめぐる言説は予備役と現役の間に序列関係を生み、結果的に予備役と現役に対立関係をもたらす。また、徴兵制度による男子学生の画一的な生活様式は彼らを明確に分離し、それぞれの集団を生むこととなる。現役や予備役は、それぞれの集団への参加を通じ、軍事文化を学習する。たとえば、新参者としての予備役は、先輩予備役から予備役の文化を学ぶ。言い換えれば、大学は、自分の役割や行動様式を学ぶ空間となる。男子の集団の形成について、現役と予備役と区別して論じるが、二つの集団は、密接な相互関係を通じて作られることを強調しておきたい。

5-1 現役集団の形成と実践

現役は、大学での軍事文化の経験や洞察を得、集団を形成する。

まず、現役は予備役との交流を通じて、軍事文化を見聞きし、その性格を洞察する。かくして、「軍隊は最も行きたくない」場となり、予備役に抵抗する。そして抵抗の手段として、現役同士の集団を形成する。現役集団は兵役についての悩みや情報を共有しながら、共に生活する。

〈事例5〉はJ学科と工学科の男子学生（19歳、1年生）の対話である。学科によっては現役と予備役との関係にも差異がある。

〈事例5：現役たちの酒の席で〉

A：うちの科（J学科）は男性の先輩たちがあまりいないでしょう。むしろ少ないから男子先輩たちとの関係が最も重要に思われます。だから男子先輩は男子後輩に

厳しいです。何人かしかいない男子後輩たちを統制できなかつたらだめだと考えるみたいです。特に学科行事がある時は…。それでそこには行きたくないけど、しょうがないから行きます。イジメが怖いです。学科行事でなければ会いたくないです。飲み会に來いと言われても行かないし、電話があってもとらない…。特に、飲み会は本当に行きたくないんです。私たち（現役）だけでお酒を飲む方がいいです。いつも、先輩たちとお酒を飲んだら、軍隊とは何とかかんとかだ、軍隊では何々をしたとか、そんな話だけだから本当にいやです。私たち（現役）も軍隊に行けば全部わかることなのに…。軍隊に行って来たことがえらいことでもないし…。また私たち（現役）だけで話すほうがもっとよく話が通じるから…。

B：ところで、うちの科（工学科）はちょっと違います。先輩たちの中にそんな人もいますが、予備役すべてがそうではないと思いますよ。工学科は男子が多いから。それで僕の科は予備役たちと親しいし、先輩たちに軍隊問題について聞いたり、そして男子が多いからあまり気を使わなくていいし、男子ばかりだから現役、予備役が別々じゃないんです。でも、もちろん現役たちだけいる時がいいですよ。

J学科においては現役集団と予備役集団の区別がはっきり観察される。J学科は男子学生数が少ないので、男子学生の間には軍隊的性格が弱いと予想していたが、むしろ、男子学生数が少ないことが軍隊的性格が強まる原因と説明されている。数が少ないからJ学科の予備役は現役の反抗を制することが重要だと考えている。こうした危機感を背景に軍事文化は強化される。そして、抵抗する手段として現役同士は集団を形成する。それは、〈事例5〉からも読みとることができる。J学科の状況では現役の力は弱い。そのため、現役同士が集まり、学外を活動拠点とする。これこそが予備役からの支配を抜け出す方法である。

とはいえ、現役と予備役とは常に対立関係にあるわけではない。J学科において彼らは同じ男性としてマイノリティに位置し、女子学生と対立関係にあるからだ。

〈事例6：J学科の学生会長選挙〉

学科の学生会長選挙に予備役1人と女子学生1人が出た。予備役たちだけの話し合いで女子学生が会長になることはよくない。今回は絶対だめだとある予備役が言った。女子学生は仕事も下手だし、後輩の統制もできないし、とにかく女子学生は能力が足りないと話した。この話がどのように女子学生たちに伝わったか定かではないが、女子学生たちにも知られるようになった。それで女子学生たちと対立が始まった。結局は予備役と女子学生のけんかになった。結果は女子学生が当選した。

予備役の後ろには現役の支持がある。現役は予備役たちと対立的な関係であるにもかかわらず、予備役を支援する。J学科は女子学生が中心のため、男子学生はマイノリティである。さらに、現役は、予備役との関係で二重のマイノリティである。このため、学生会長選挙で、現役は予備役を支援し、女子先輩の統制から抜け出そうとしたが、抵抗にあっ

て失敗したのである。

現役が集団を形成する二つ目の理由は、兵役についての悩みや情報を共有するためである。個人の兵役に対する悩みが個人的な問題から集団的な問題に転換し、共有される。このようなことが現役集団の形成を促すと思われる。

〈事例7：現役たちの酒の席で——予備役とともに受ける大学の講義が終わった後〉

C：予備役の人たちさ。変じゃない？男らしく行動しなくちゃと思うのかもね。声も大きいし、講義であたりまえなことを質問するし…。後輩たちを力で抑えようとするし。それが男らしさかな。〇〇先輩は予備役だけど、ちょっと違うよね。あの先輩はいいけどね。予備役はみんな似ている。予備役って共通して浮かび上がるイメージあるよね。話し方も本当にへん。予備役を見ながら、私が予備役になったら、絶対、あんな風になりたくない。 (男性, 19歳, 1年生, 現役)

この時、店に予備役が入って来た。その瞬間、現役は話題を変えた。その後、酒の席を終える雰囲気になった。その時ある予備役がもっと一緒にお酒を飲もうと誘ったが、現役たちは帰らなければならないと断った。このため予備役は文句を言った。

現役のインフォーマルな集まりは予備役から自由になる集まりである。予備役がいないことにおいて意味がある。現役だけの空間で現役は予備役の振る舞いとをとりえ、軍事文化を洞察し、抵抗するための会話を交わす。しかし、このような会話の中、現役は自分の兵役の義務をもう一度認識する。「私が予備役になったら、絶対、あんな風になりたくない」という表現から自分もいつかは入隊しなければならない状況にいることを認識していることがわかる。

〈事例8：現役たちの酒の席で〉

D：お酒を飲む時入隊の話が出るじゃないですか。みんな個人的にたくさん悩むけどお酒を1杯、2杯飲みながら1年を過ごしていると、1人、2人と、軍隊に入り始めます。「俺、軍隊に行く…」という話を聞くと、私も入隊する時が来る気がします。そろそろ一緒に学校に通った友達が休学し始めたし。

(男性, 20歳, 1年生, 現役)

E：入隊の時は友達が壮行会もしてくれるし、いろんなことたくさんしてくれるじゃないですか。友達が軍隊に行くと言えば、その時から他の友達も行き始めるから大部分そのために会う場合が多くなります。軍隊に対する悩みや情報もお互いに共有して…。軍隊に行く友達を見れば私も不安になります。私も行かなくちゃいけないので。

(男性, 19歳, 1年生, 現役)

〈事例8〉から現役集団の仲間入隊は他の現役の入隊時期に影響を及ぼすことがわか

る。仲間の入隊を見て、自分の入隊が遅いと感じるのである。こうして現役集団の成員の入隊が相次いで生じる。

その原因として、入隊の時期についての言説の影響と、入隊による現役集団の解体の2点が挙げられる。

まず、入隊の時期についての言説について論ずる。「なるべく早く行くほうがいい」という言説があり、これが現役に影響を与える。誰も入隊の時期を考えていない時期に、ある成員1人が入隊の時期を決めると、それが「なるべく早く」という基準となり、まだ入隊の時期を決めていない自分はもう遅いと感じる。

〈事例9：仲間の壮行会后——軍入隊のために休学を決めた学生との面談で〉

友達みんなが軍隊に行くのに、私だけ残って何をしますか。予備役と女の子はいるけど…。女の子は軍隊に行かないけど、私と女の子は生活が違います。今までいつも同じ友達と生活してたから…。友達が軍隊に行く時、私も行ったほうがいいと思うよ。そうしたら、除隊してからまたその友達と生活することができるから…。不安だし。

(男性, 20歳, 1年生, 現役)

それでは、なぜ現役集団の仲間の入隊が現役集団をなくしてしまうのか。一つは現役集団の成員の入隊により、仲間がいなくなり、結局は自分の入隊を決めざるをえないためである。もう一つは、〈事例9〉のように、同じ時期に入隊すると除隊、復学など兵役を終えた後の生活が一緒にできると思うからである。こうして、現役集団は、将来は予備役の集団として再び生まれ変わるのである。

5-2 予備役集団の形成と実践

現役と同じように予備役も集団を形成する。J学科で予備役の集団が生まれる要素は三つである。それは1)新しい環境への不適應, 2)入隊前の現役集団の成員との除隊後も続く関係, 3)予備役に関する言説の影響である。

まず、新しい環境への不適應とは何であろうか。

〈事例10：新入生歓迎会に参加した予備役との面談で〉

3年くらい学校からはなれて、学校についてぜんぜんわからないからさ、新入生と同じです。新入生の時、私も入隊する前は、予備役と会ったら、いごちが悪いし、あまり好きじゃなかったです。今、その俺は予備役。たぶん、後輩も同じだと思います。新入生はかわいって先輩たちはかわいがるよね。私たちを、誰かわいがってくれますか。自分で生きのこらないと。軍隊に行ってきた友達に寄り掛かるしかないのです。

(男性, 25歳, 予備役)

軍隊から大学に戻るまで、平均2年3ヶ月の兵役、休学、復学などの期間を含め約3年かかる。入隊前、一緒に生活した女子学生や軍隊に行かない男子学生は、すでに卒業して

いるか卒業直前で、就業や大学院への進学準備に忙しい。それだけではなく、学科には見知らぬ先輩や後輩たちが多く、新しい環境に適応しなければならない。このような状況が予備役同士の結束を強化する。特に、J学科は男子学生の数が少ないため、結束は強くなるのである。

現役集団の成員は同じような時期に入隊し、同じような時期に学校に戻る。これが予備役集団が生まれる二つ目の要素である。J学科において、予備役集団の形成は現役集団の時期からその可能性が見られる。兵役中も現役集団の人間関係が続く。J学科では兵役中の男子学生は、友達が兵役を遂行している部隊の住所、休暇の予定日だけでなく、お互いの部隊の最近の情報、訓練日程を詳しく知っている。異なる部隊で兵役をしても、休暇の時期を調整して会ったり、電話や手紙で軍隊生活についての情報を共有したりしている。このようにして関係を維持するのである。

一方で、予備役集団は入隊前の現役集団と必ずしも一致するわけではない。たとえば、J学科の現役集団は同じ学番²⁾(2003年の学番)男子学生から構成されていた。しかし、予備役集団は学番(調査対象者の場合1998~2000年間の学番)に加えて、軍番(調査対象者の場合1998~2001年間の軍番)によって細かく細分され、序列化されるからである。これは外部からは理解しにくい。さらに配属部隊によっても予備役の間に差異が生じる。

〈事例11：予備軍訓練後の酒の席での会話〉

F：俺、軍隊にいるとき、部隊の中に小さな丘みたいな山があったんだけど、そこに倉庫を建てなきゃなんねえことになって、で、ほんとに俺の部隊のやつらと登って、シャベル持って山、全部切り崩したんだぞ。おい、あんなのいつ全部、掘るんだって思ったけど、一週間やったら山がなくなるもんでさ。

(男性, 24歳, 3年生, 予備役)

G：おい、もともと全部、自分のやったことが一番辛いことなんだよ。その場で、他のことはやってみたことないから、自分がしたことが一番辛いて思うんだよ。肉体的に辛かったこと、それだけが辛いことか？ 体でやることはまだましだろ。俺みたいに、徹夜でコンピューターの前に座ってワードの作業だけしてみろ。お前たちのやることはそれ終わったら、もうやらせないじゃないか。俺はほとんど、毎晩、徹夜の作業だった。ほんとに、死ぬような苦勞だったんだ。

(男性, 25歳, 3年生, 予備役)

H：笑わせんな。おい、帰って、キーボードでも打ってる。俺がお前と同じだったら毎日、徹夜するぞ。お前はシャベルを使うのがどんだけ恐ろしいか知らないんだ。

(男性, 26歳, 4年生, 予備役)

〈事例12：事例11のGと個別面談で〉

G：私のように軍隊の事務室で働いた人は軍隊経験について話す時何も言えないんです。海兵隊など本当に肉体を使う部隊の出身は偉そうに…。服も海兵隊マークがあるものを着て…。海兵隊の出身だからそんな服を着て通うことができますよ。

(男性, 25歳, 3年生, 予備役)

〈事例11〉から、同じ予備役にもかかわらず、軍隊で誰が最も男性的あるいは暴力的な経験をしたのかにより、予備役集団の中で序列関係が作られる。暴力的な軍隊経験は男性性を象徴し、価値があるとみなされている。実際に、この予備軍訓練後の酒の席で〈事例12〉のG予備役は低く見られている。また、自分の軍隊経験が、他の予備役の軍隊経験より男性的な経験ではなかったと知っていることがわかる。

しかし、実際に軍隊で暴力的な苦痛を経験した予備役が彼らの経験を価値あるものとして認めているのかというと、そうとも言えない。軍隊での暴力的な苦痛の経験は二度としたいくない、無駄な時間、意味のない経験だと思われるからである。このような本心を補おうとして暴力的な経験を過剰に讃えるのである。このように同じ予備役にもかかわらず、予備役集団の中にも区別がなされ、序列が生れる。

軍隊経験が予備役の間に序列を生み出す一方で、学番による序列には変化はない。これは軍隊経験による男子学生中心の序列関係が大学における序列関係——広い枠組として——を崩すことを避けるためだと思われる。

最後に、予備役についての言説の行為遂行性について述べておこう。予備役に与えられた積極的な観念は予備役に力を与えると同時に、「予備役らしさ」の実践が期待され、「予備役になれ」という社会のまなざしにさらされることになる。

〈事例13：大学の体育大会の日、女子学生との面談で〉

I：予備役は勉強も一生懸命するし、何でも一生懸命にするみたい。自分が引き受けた仕事は最後まで責任を持ってするんです。そんな様子を見ると、男子は軍隊に行ってくれば成長するんだなあと思います。現役は何か幼く見えて…。

(女性, 19歳, 1年生)

J：その通りです。軍隊をまだ終えてない後輩は幼く見えます。見てくださいね。今日もそうじゃないでしょうか。特に学生会の仕事を一緒にしてみれば確かにわかる。仕事をさせても適当にしているし。でも、予備役は違います。後輩を統制して、働くところを見ると…。なんかね、頼もしい時が多いです。

(女性, 21歳, 3年生)

上の事例のような語りを通じて、予備役が自らここに描かれているのと同じような存在になるように強要することになる。

〈事例14：体育大会の日、予備役との面談で〉

前に、私が復学する時のことを考えたことがあったんですよ。私は絶対に先輩予備役のようになりたくないと思ったんです。ところが今はあまり自信がないんです。予備役に対して、人々の持つイメージがあるから…。学科の仕事に関心を持たなきゃ。大変なことも先にやらなければならなくて。一言で言うと男性らしくて、頼もしく見え

なければならぬからです。率直に言うと、私もそんなことしたくないんですが、でも予備役たちがみんなそのように生活するから。後輩たちが思うこともそうだし。私が見てきた先輩予備役と同じようになるかも。時々現役に暴力的になるし…。とにかく、予備役に期待される予備役らしさがあると思う。(男性, 25歳, 3年生, 予備役)

〈事例14〉のように予備役には予備役としてふさわしい行動が期待される。大学の行事は男性中心である場合が多い。特に体育大会では男子学生が中心になる傾向が強い。サッカー、バスケットボール、バレーボールなどの試合は男子学生だけが参加できる。このような男性中心の行事には予備役集団の役割が重要である。大学の中で予備役集団が、他の集団より重要な役割を演じる理由について、Kim Unjin [2002] は、「女子学生の間には予備役のような集団が形成できない。一方、男子学生の集団の間には序列関係が強い、上位に権力が集中し、その権力を予備役が持つからだ」と述べる。

以上のように、新しい環境への不適応、入隊前の現役集団成員との除隊後も続く関係、予備役に関する徴兵制の社会表象の実践により予備役は集団を作る。

6 「境界」を越える実践

これまでは男子学生を中心に、徴兵制がどのように彼らの日常生活を巻き込むのか、どのようなプロセスにより男子同士の集団が作られるのかについて論じてきた。それでは、男子学生中心の軍事文化の中で共に生きる女子学生はいかに描くことができるだろうか。これからは女子学生を含むJ学科の日常を見ることで、さまざまな対立——男性/女性、現役/予備役、先輩/後輩など——を超え、徴兵制についての言説が実践され、大学内部に軍事文化が作り出される過程を考察する。

学科の行事の準備には多くの労働力が要る。また、ジェンダーによる分業が明確で、男子学生への負担が大きい。この時、予備役は現役を効果的に統制する必要がある。この統制方法の一つが学番による序列関係の活用である。現役は予備役にとって階級が低い兵士と同じ存在である。そこで、予備役は軍隊経験を喚起して暴力を行使する。

〈事例15：現役の酒の席で〉

軍隊よりも暴力的だと思う。頭を地面につけると言って…。このごろ軍隊でもこんなことしない。どうしても、予備役は軍隊経験があるから、言葉より暴力で私たちを統制しがちだ。学校にも学番があるから、無視することはできないし…。しょうがないです。いやなら、命令される通りにしなくちゃ。楽なのが一番だから。

(男性, 19歳, 1年生, 現役)

暴力は軍隊では正当化されている。現役が暴力に激しく抵抗できない理由は大学の集団的性格のためである。学科は先輩と後輩の関係で緊密につながっているため、先輩を無視することはできない。しかし、暴力の行使は予備役個人の性向によって差がある。

〈事例16：大学祭の時〉

いつだったかな、予備役たちが私（現役）たちを呼び集めたんですよ。それで行ったんですけど。その時はいつも出てくる暴力的な先輩はじっとしているんですよ。他の先輩が私たちを言葉でたしなめるんです。その暴力的な先輩はただ見ているだけです。その先輩が今我慢していると言うんですよ。予備役たちはお互いに話しあったと思いますよ。殴らないでください。（男性、19歳、1年生、現役）

〈事例16〉から、暴力が背後にあっていつでも現れることが暗示されている。予備役は、暴力以外に現役を統制する効果的な方法を見つけることは難しい。その理由はすでに述べたように、現役は学外に活動拠点を持つためである。〈事例16〉に関して予備役はこのように述べる。「私たち（予備役）がいつも暴力的だったら後輩も私たちが嫌いになるかもしれない。」このように予備役も他の学生が見る自分たちの性格について知っている。直接暴力的な方法を使わずに、現役たちとの対立を避け、適切な関係を維持しようとする。それにもかかわらず、現役たちに対し暴力の脅威が潜んでいるということを暗示することには変わりがない。これもまた暴力の行使を通して序列関係を維持することを意味する。

〈事例17〉は、教師を含むJ学科の秩序がいかにか結末と排除（ここでは女性教授、現役女子学生）を通して成立しているのかがわかる。

〈事例17：1泊2日のMT（membership training）を兼ねたJ学科の学術ゼミで〉

学術ゼミが終わって夕方に飲み会があった。広い部屋で飲み会の準備を終えて、学生は教授を待っていた。教授たちが入ってくるたびに学生全員が一斉に立ち上がった。女性教授二人が先に入ってきて次に男性教授二人が入って来た。学科長のあいさつから飲み会は始まった。2時間ぐらいでさまざまな行事が終わって、自由に酒を飲む雰囲気になった。その途中、女性教授たちが先に外に出た。その後、男性教授たちが席を外した。彼らはどちらかの部屋に移って酒を飲み続けた。このことを知った予備役10人が男性教授がいる部屋に押しかけて飲み続けた。予備役たちが席を外した後、現役や女子学生たちは部屋に戻り、酒の席は終わった。

男性教員と予備役の酒の席は夜明けまで行われた。ここで予備役たちは軍隊経験に関する話をし、また軍人のように振る舞った。彼らは学科全体の酒の席では女子学生がいたこともあり、静かに酒を飲んだ。しかし、教授の部屋では男性教員に対して丁寧に行動し、学番での序列関係を強調する軍人特有の行動をとった。このような行動により予備役集団の結末は強化されるのである。

〈事例18：個別の面談で〉

K：同じ99学番の友達と一緒に復学したJ先輩がいます。うちの学科（J学科）は男子学生が少ないから予備役の関係が密接です。で、J予備役がうちの学科のある女の子と付き合ったんです。私の友達だけど…。だから、J先輩は〔彼女との付

き合いを優先して] 予備役の集まりに行かないで、関係が遠くなったんです。そして、J先輩と付き合った私の友達が休学しました。だから、J先輩1人になったんです。それで先輩、なんかイジメられているような…。他の予備役から。

(女性, 23歳, 3年生)

L: 最近, そのA後輩, 私に電話して一緒に食事しようと言います。私は学科の事務で働いているから教授と食事する時も多いし, 昼休みを合わせにくいし。一度集団を外れると, また入って行くのは難しいようです。

(男性, 26歳, J学科の助手)

〈事例18〉から, 予備役の集まりに参加しない予備役を集団から排除したことが観察できる。こうした実践を通して予備役の集団的性格が維持され, 大学の他の学生たちが予備役を集団として認識するようになる。

先行研究から見ると, 軍事文化が女性にさまざまな被害を与えているのは自明である。にもかかわらず, J学科ではむしろ, 女子学生が徴兵制についての言説をさまざまな方法で利用する。女子学生は大学を支配する軍事文化や男子同士の集団に現れる軍事文化を洞察し, 日常で利用し, 時に抵抗する。

〈事例19〉と〈事例20〉から, 女子学生が予備役が持っている現役に対する統制力を利用し, 現役を統制しようとしていることがわかる。

〈事例19: 大学祭で〉

現役たちが言うことを聞かないんですよ。そんな時は予備役の先輩に話します。男子後輩たちのせいで仕事が進まない。そしたら予備役が現役たちみんなを集めます。何があるか知らないけど, その後では仕事がスムーズに進みます。現役たちは, 予備役が私(女子学生)たちのバックにいるということを認識するようになるんです。

(女性, 21歳, 3年生)

〈事例20: 大学祭で〉

予備役たちが現役をどこかに連れて行った後に現役たちの行動が変わるのを見れば, 何の意味だかわかります。直接経験したことはないけど, 聞いてみると軍隊と同じようにすると。とにかく予備役たちは軍隊に行ったことがあるから, どのようにすればいいのかわかっているはずだから。私たち〔女子学生〕にはそんな力がなんでしょう。だから, それを利用するほうが一番早い方法だという気がします。

(女性, 23歳, 4年生)

これは女子学生も軍事文化の性格をよく理解していることを意味する。現役に対し予備役がどんな権力を持っているのかを洞察している。現役と予備役との関係に比べると, 現役に対して女子学生が持つ権力は弱い。だから, 女子学生は自分たちの弱点を補うために軍事文化を利用する。〈事例19, 20〉のように学科の行事の時, 女子学生たちは予備役に

状況を説明し、現役を自分たちにとって扱いやすい存在に変えることができる。予備役自身にも利がある。現役を統制し、学科の行事が順調に進めば、いい意味で予備役らしさを発揮することができると思うからだ。もう一つの事例を見よう。

〈事例21：大学祭の準備現場で〉

大学祭のためにみんなで酒店を準備していた。しかし酒店のためにテントを立て、机を運ぶなど、力が必要な仕事は男子学生が中心になった。女子学生たちは買い物したり、案内文を作ったりした。男子学生たちは忙しく動かなければならなかった。仕事がなかった女子学生たちは、男子学生たちの姿をのんびりと見ていた。その時ある予備役が手伝ってくれと言った。その言葉を聞いたある女子学生が「軍隊に行ってきたのに何でそんなに重いものを私たち〔女子学生〕に手伝わせせるの」と文句を言い、手伝わなかった。

〈事例21〉から、女子学生が「兵役を終えたこと＝男らしさ」という言説から生まれる予備役らしさを利用して、自分たちの態度を正当化していることがわかる。

女子学生は自己の利のために既存の言説を利用する。一方で、それが自分に不利な影響を及ぼす場合には抵抗する。すでに述べたJ学科の学生会長選挙の事例から女子学生の抵抗が認められる。

〈事例22：学科の学生会長選挙の期間に個別面談で〉

女子学生が学科の学生会長をすることはちょっと問題じゃないでしょうか。自分を犠牲にすることも知らなくて、苦労した経験もないので。とにかく、学生会長は予備役がするほうがいいと思いますが…。予備役は軍隊で組織的生活をしたことがあるので、女子学生よりはよくわかっています。とにかく男子学生がするほうがいいと思いますよ。

(男性, 26歳, 4年生, 予備役)

〈事例22〉から、予備役が女子学生を軍隊経験がなく、能力が足りない、弱い存在として認識していることがわかる。このため、女子学生に学科を預けるのは無理だと考える。しかし、〈事例22〉の話が女子学生に伝えられ、女子学生の抵抗を引き起こしてしまった(事例6を参照)。女子学生はそれまで、集団的性格を持っていなかったが、これを機会に集団的な行動に出たのである。それで、女子学生と予備役、また、現役の間に、緊張が生まれた。学生会長は選挙により選ばれるため、数で上回る女子学生が勝つわけである。

以上のように軍事文化や徴兵制についての言説は、状況と文脈が異なると意味が変わるのである。徴兵制度は、男子学生の生活を一定の方向で制限し、男子学生たちに画一的な生活を強要する。男子学生と一緒に生活することで女子学生も軍事文化の性格を把握し、政治的に実践することが可能となる。特に女子学生が予備役と協力し現役を統御するという事例はこれまでの軍事文化研究では見落とされていた指摘であると思われる。男性だけでなく女性をも巻き込む形で軍事文化が作られるのである。

7 おわりに

韓国社会には軍事文化が深く根ざしている。このような傾向は大学にも認められる。徴兵制は男子学生の日常生活を画一的に制限し、現役や予備役の集団を生み出す。

現役は集団を形成し、大学という空間で徴兵制を考え始める。このような考えは入隊前の現役生活は意味がないという認識へとつながる。この結果、現役はしばしば講義を欠席し、飲み会などの遊びに興じる。これは一種の抵抗と言える。このような画一的な生活様式は「兵役を終えてない男子学生は未熟だ」という徴兵制の社会表象を強化することになる。

予備役も集団を形成する。予備役を一人前の男性として認識する言説があり、それが彼らに力を与える。

女子学生は男子学生ほど集団的性格が強くない。軍隊も経験しない。それにもかかわらず、彼女らは徴兵制についての言説を自然に受け入れている。しかし、女子学生がこの言説を受動的に受け入れているわけではない。

J学科は女子学生が圧倒的多数を占め、男子学生は少数である。このような状況では軍事文化が弱いと予測された。しかし、男子学生は少数であるゆえかえって、軍隊的性格を強めている。予備役は数的に不利な立場を克服するため、自分たちについての言説を実践する。それを女子学生が利用する。

徴兵制を中核とする軍事文化は予備役の復学を通じて大学に浸透する。大学は、軍事文化と日常生活とのコンタクト・ゾーンと言える。一方、軍事文化は支配的ではあるが、そのまま受け入れられるわけではない。現役や女子学生など、立場によって軍事文化の受け止め方が異なる。また外から見ると一体に見える予備役の間にも軍隊経験の相違によって序列が認められる。大学キャンパスは、徴兵制をめぐる言説とその実践をめぐるさまざまな思惑が交錯する場を形成しているのである。

追記

本稿は修士論文『軍事的言説を通じて見る韓国の大学における軍事文化の再生産』（2004年漢陽大学院社会人類学科提出）をもとに、大幅な修正を加えたものである。

注

- 1) 兵務庁は韓国の兵役に関する業務を担当する政府組織の一部である。本庁には四つの本部、19個のチームがあり、11の道、市に地方兵務庁が設置されている。また、二つの兵務支庁、ソウルの本部に中央身体検査所を設置、運用されている。兵務庁は韓国国民の16.7%に当たる803万名の兵役対象者を管理する組織である。
- 2) 現役の地位の低さを表すものに学番がある。学番とは入学年度を意味する。たとえば、2006年に入学した学生は2006○○○○という学番を受ける。しかし、これは単純な数字ではない。学番とは年齢に関係なく、早い学番の学生が先輩になる。軍隊の「軍番」と同じものである。軍番とは入隊した年、月、日を示す番号である。軍番も年齢とはまったく関係なく、序列（階級）を作る。

参考文献

- ウィリス, ポール 1985 『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗・労働への順応』(熊沢誠・山田潤訳) 筑摩書房。
- 権仁 淑 2006 『韓国の軍事文化とジェンダー』(山下英愛訳) 御茶の水書房。
- 田中雅一 2004 「まえがき」『人文学報』90:i-v。
- 2004 「軍隊の文化人類学研究への視覚——米軍の人種政策とトランスナショナルな性格をめぐって」『人文学報』90:1-21。
- レイヴ, ジーン & エティエンヌ・ウェンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』(佐伯胖訳) 産業図書。
- Harrell, Margaret C. 2003 Introduction: Subject, Audience, and Voice. In Frese, Pamela R. & Margaret C. Harrell eds, *Anthropology and the United State Military: Coming to Age in the Twenty-first Century*. New York: Palgrave, pp. 1-14.
- Hyun, Teaksu 編 1998 “문화와 권력”, 나남출판사. (『文化と権力』)
- Hong, Duseung 1993 “한국 군대의 사회학”, 나남출판사. (『韓国軍隊の社会学』)
- Jung, Juyeon 他 2003 “한국병영정책의 바람직한 진로”, 韓国国防研究院. (『韓国兵役政策の正しい進路』)
- Kim, Unjin 2002 ‘남녀공학으로 전환된 대학의 여성리더에 관한 연구’ 新羅大学社会政策大学院女性学専攻修士論文 (『共学大学へ転換した大学の女性リーダーに関する研究』)
- Kim, Hyeonuk 2002 ‘일상생활 속의 군사주의 재생산과 성별 경험: 의식, 경험, 행위 간 관계를 중심으로’ 『韓国女性学』18 (1): 71-107. (『日常生活の中の軍事主義の再生産と性別の経験——意識, 経験, 行為の関係を中心に』)
- Kwon, Ohbun 2000 ‘군대경험의 의미화 과정을 통해 본 군사주의의 성별정치학’ 梨花女子大学大学院女性学専攻修士論文. (『軍隊経験の意味化の過程を通して見る軍事主義の性別政治学』)
- Lee, Donghun 1995 ‘한국 군대 문화 연구’ 『韓国社会学』29: 171-198. (『韓国軍隊文化研究』)
- Lee, Namseok 2004 ‘양심적병역거부자와 시민불복종’, Cleanbe. (『良心的兵役拒否者と市民不服従』)
- Moon, Seungsuk 2005 *Militarized Modernity and Gendered Citizenship in South Korea*. Durham: Duke University Press.
- Oh, Miyoung 2001 ‘군사화에 의한 젠더위계체제 강화’ 新羅大学社会政策大学院女性学専攻修士論文. (『軍事化によるジェンダーの位階体系の強化』)
- 2003 ‘군사주의와 여성의 섹슈얼리티’ 『女性研究論集』, 新羅大学女性問題研究所 (『軍事主義と女性のセクシャリティ』)
- Park, Jinhwan 2006 The Reproduction of National Military Culture within South Korean Universities: The Draft System and its Discourse and Practice. *Asia Youth Culture Camp* 2:101-105.
- 2007 ‘대학, 군대문화의 실천커뮤니티-우리들은 대학에 무엇을 배우는가’ 『Piraten』1: 192-212. (『大学, 軍事文化の実践コミュニティー——われわれは大学で何を学ぶのか』)
- Rin, Jihyun 他 2000 “우리안의 파시즘” 삼인. (『われわれの中のファシズム』)
- Son, Sutae 1998 ‘군대문화와 사회문화’ 『行政論集』 東国大学26: 87-115. (『軍隊文化と社会文化』)

インターネット資料

- 兵務庁ホームページ <http://www.mma.go.kr> 2007年4月4日閲覧。
- 陸軍ホームページ <http://www.army.mil.kr> 2007年4月4日閲覧。
- 兵役法ホームページ <http://www.lawnb.com> 2007年4月4日閲覧。